

第拾九號

文明之母第十九號目次

本誌ハ每月二回三日十八日に發行す

本誌ハ前金に非れば發送せず

本誌の定價は一册金六錢十二册半年分金六十八錢廿四册一年分金一圓卅錢全國無遞送料

本誌の廣告料は「五號活字廿三字詰」當り左の如し

壹行	金八錢	二回	金七錢
三十行以上（壹回）	金七錢		金六錢
六十行以上（回）	金六錢	以上	金五錢

本誌の見本は郵券六錢を送らるれば呈す

本誌代金御回送の節ハ內國通運早達便又は東京郵便局へ御振込被下度

郵券代用は一割增

本誌の前金將に相切れんとする時ハ其卷の宿所姓名を朱書して發送すべし

主筆　大矢森之助

發行兼編輯人　中村一　東京深川區高橋町十三番地

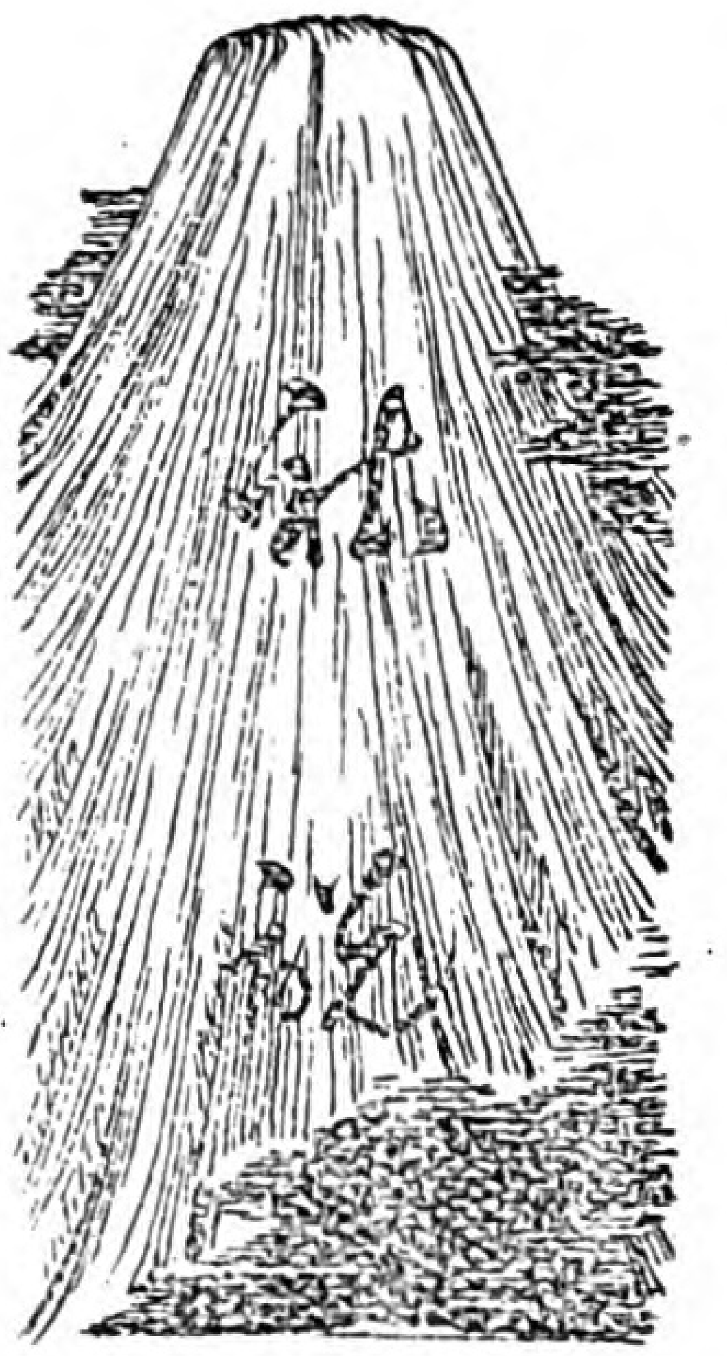
印刷人　小西石造　東京深川區仲町八番地

版權所有

發行所　生文社　東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地

文明之母第十九號

明治二十三年二月十八日發兌



○廢娼と存娼との世論並に之に就きての吾人の意見

吾人は夙に娼妓の廢す可きを主張するものなり、如何ありても廢せざる可からざるを主張するものなり、而して今日に至るまで、之に就きて一言の意見を陳述するの間を得ざりしは、大に遺憾とする所なり。然るに幸にも世の正義の士は、或は筆に或は舌に、正々堂々として其の持說を極論し、其の所見を痛議し今や天下の大勢を驅りて、駸々廢娼の正路に赴かしめんとするの勢あり。故に吾人は今更茲に筆を握り、事新らしく喋々するの要を見ず、否正義の諸士の論ずる所概ね娓々數千言、微に入り細を穿ち、また吾人として新に喋々せしむるの餘地を殘さず。然れども吾人は全然一言を爲さずして止むは衷心實に忍びざるものあるを以て、茲に聊か是れまでの娼妓存廢の世論の概略

を記し（管見をも交へて）而して廢娼の理論に就き、未だ何人も言ひ及ぼさゞりし一事を附論せんとす。而して吾人が今存廢の世論を略記するに當り、一言以て讀者諸子に注意を促す可きの事あり。存娼論なるものは同じく數年前の存娼論にして、依然其の形を改めず、然るに廢娼論に至ッては又決して舊時の廢娼論にあらず、大に議論の進歩を來たせしこと即是れ也。蓋し進歩と見るなきの議論は其の眞理に合せざる所以にして、進歩を見るの議論は其の眞理に合する所以を徴するに足る可し。

存娼論の第一義に曰く、人間の性欲なるものは決して抑制し得可きにあらず、即ち劣情なるものゝ如きも決して容易に抑制し得可きにあらざるなり。故に娼妓などの如きも國家の體面上、素より不都合なる者には相違なきも、一時に之が公許を廢す、未其の可なるを見ざるなり。何となれば娼妓公許は位置と定め、區畫と限ることとなれば、淫風は其の位置の中にのみ、其の區畫の中にのみ吹く可きも、若し之が公許なければ、社會一般何れの處にも吹き廻るべし。人間の性欲は決して抑制し得可きものに非ればなり、劣情なるものも決して除却し得べきものにあらざればなり、一方に於いて壓すれば他の一方に於いて發するものなればなり。取りも直さず、存娼せば場所と定むるを得るも、廢娼せば區畫を限る能はず、存娼せば淫風をして一局部に吹かしむるも、廢娼せば之

をして全部面に吹かしめざる可からず、存娼せば其の害小なるに止まり、廢娼せば其の毒大にして底る所を知らざるなり。

廢娼說の駁論に曰く、是れ一應は理あるの言に似たれども、其の妄誕なること再考を俟たずして明かなり。人間の性欲などを論ずるには必らず心理學の原則に依らざる可からず、然るに彼れ存娼論者の言は之に相反するものなるを如何せん。夫れ人間なるものは其の目に見、耳に聞く所のもの愈々其の度を重ぬるに從ひ、自然に精神上に感情を形造るものなり。乃ち之を娼妓の上に於いて言ば、今娼妓なる者を公許し、之を社會に存在せしむるならば、社會に在る人が日常之を目にて見るなり、日常之を耳にて聞くなり、愈々之を見之を聞くに隨ひ、益々其の精神上に結晶する所の者は果して何物ぞ、果して何物ぞ。「江南三月春風多、人在重簾夢梅花。」嗚呼梅花を夢むるは何に依りしか、春風吹き到ればなる可し。春風吹き到りて梅花を何故に夢むる乎、嘗て春風吹き到りて梅花を觀たることあればなる可し。未一たびも春風に接せざる者が、未一たびも梅花を觀たることなき者が、春風吹き到りて梅花を夢むること、決して有るまじきの道理なり。嘗て春風に接したるものにもせよ、未梅花を觀たることなければ、又決して之を夢むる道理なし。是れ實に心理學上動かす可からざるの定論なりとす。此の定論

三

を規矩とし尺度とし娼妓の存廢を度らんか、其の是非とも廢せざる可からざるは多言を要せざる可し。何となれば娼妓を公許し、人に見さしめ聞かしむるは、人の腦髓中に劣情てふ劣情を勃起せしむるなり、遂に形成せしむるなり、乃ち一局部に限らんとするの淫風をして決して一局部に限らしむること能はざるなり、實に全部面をして漸々之に浸潤せしむるなり。

存娼論の第二義に曰く、夫公許とは公に許すことなり、公に許すことなれば又公に監督するを得るなり、公に檢査するを得るなり。例へば梅毒の如き公許にしてあれば之を又公に檢査するを得べきなるが若し然らずして密賣たらしめば如何。公に許しあれば公に檢査し得可しといふに對し、密に賣らしめば密に檢査し得可しと云ふの理屈立つ可きか。梅毒は恐る可き病症なり、之をして盛んならしむれば、向後の日本人は或は鼻落ち、或は耳流れ、或は目盲し、或は口閉ぢん、眞に恐る可き病症なり。此の恐る可き病症をして、內部に蟄伏せしめて果して不可なき乎。要するに人間の劣情なるものは第一義にいひし如く、決して抑制し得可きものにあらず、一方に於いて之を壓ふれば必らず他方に於いて發す可し。故に娼妓の公許を廢すれば必らず又密賣の密なるもの起る公許は公檢するを得可きを以て其の毒を制限するを得可きも、密賣は公檢する能

はざるを以て其害の流るゝ實に底止する所を知らざるなり。極論すれば娼妓の公許あらざれば、或は我日本人をして不具の人種たらしめ、果ては日本國をして不具の國たらしむるやも知る可からず。

廢娼說の駁論に曰く、右の議論は實に薄弱なるものなり、一吹噓を俟たずして自ら仆れんとするものなり、特更に攻擊するの價値あるものに非るなり。人間の劣情なるものは決して抑制し難き云々の論は、已に第一義駁論に於いて消滅し去りたるものと見做し、爰に又新しく喋々するを要せず。而して既に其の說の消滅し去りし者とせば、此の論も亦自然消滅せざる可からず、決して成立つ可からず。何となれば此の說は單に彼の說を引き延ばしたるものに過ぎざればなり、彼の說を演繹し來ッたるものに過ぎざればなり。然りと雖も此の說は實に存娼論者の金城鐵壁と賴む者と聞けば、一言を費さずして止むは情に忍びざる所あり。故に玆に一表を掲げて公許せざれば密賣起る、公許と密賣とは必らず轉比例を爲すものなりといふ妄信を打破し、公許せざれば密賣も隨ッて減ずるといふ正理を證せんとす。

賣淫公許の三縣(神奈川、愛知、長崎)の私生兒

	人口百に付私生兒比例	公生兒百に付比例
二十年	〇、一二二	四、四七一
十九年	〇、一〇四	三、八五一
賣淫公許せざるの三縣(岐阜、和歌山、鹿兒島)の私生兒		
二十年	同前 〇、一〇一	同前 一、四六一
十九年	〇、〇七八	三、五六二

六

是れに依りて之を觀れば、存娼論者のいふとは全く相反し、賣淫公許の國には公許せざるの國よりは密賣淫多し、故に私生兒も多し。然れども此の表を見て神奈川、愛知、長崎、岐阜、和歌山、鹿兒島の六縣に止まるものとし、六縣ぐらゐの形勢を以て、我が日本全國三府四十三縣を論定せんと欲するは無理なりと論ずるものあり。嗚呼、是れ何の言ぞや、物は比較を以て定めざる可からず、彼れ三府四十三縣に比較する六縣を以て餘りに少數なりといふとも、此の六縣に比較するもの果して何くにかある。加之汎く調査せず――調査したる所だけで既に此くの如くなれば、他は概ね推知すべきなり。吾人は今尙他の府縣に對し、精密なる調査を遂げんと欲するなれば、何れ發表して存娼論者に質し、讀者諸子に示すの時あるべしと信ずるなり。又玆に前六縣の密賣の犯罪に就きての表を附し、益々其の昭々たるを確めんとす。

賣淫公許の三縣(神奈川、愛知、長崎)の密賣淫犯罪者

	密賣淫犯罪者	人口百に對する密賣淫犯罪者
二十年	〇、八六八	〇、〇二二
十九年	一、二六一	〇、〇四二

賣淫を公許せざる三縣(岐阜、和歌山、鹿兒島)の密賣淫犯罪者

	同前	同前
二十年	〇、三五八	〇、〇一〇
十九年	〇、三九九	〇、〇一六

右の二表は塚越芳太郎氏の調査したるものにして、實に疑を容る可からざる證表なり。説いて茲に到れば娼妓の增減に就きても聊か講究せざる可からざるものあり。元來娼妓は何故に增すものなるか、何故に減ずるものなるか、存娼論者は娼妓の增すを以て益々淫風の減ずる所以となし、愈々不德者の減ずる證據と爲す乎。吾人は又反對の斷定を下さゞるを得ざるものあるなり。兎に角昨年毎日新聞の調査に係る貸座敷及び娼妓の增減は左の如し。

地名	貸座敷			
	年末現在			
	二十一年	二十年	十九年	十八年

七

地名				
新吉原	一一二	一〇二	九九	八九
深川洲崎	九七	一〇三	一〇四	一〇五
品川宿	六二	六三	六四	六四
内藤新宿	五九	五九	五九	五九
板橋宿	一四	一四	一四	一四
千住宿	三五	三五	三七	三八
合計	三七九	三七九	三七七	三六九

本表中深川洲崎は昨年六月根津より移轉す仍て累年は根津の分を掲ぐ

娼妓

地名	年末現在 二十一年	二十年	十九年	十八年
新吉原	二、〇七二	一、八二二	一、七一一	一、五七四
深川洲崎	一、〇〇九	九六〇	九三五	九二三
品川宿	六〇三	五七〇	五五一	五七七
内藤新宿	四五九	四一〇	三九五	三六一

板橋宿	一三八	一〇七	一〇四	一一四
千住宿	四六六	四六九	四五二	四四八
合計	四、七四六	四、三三八	四、一四八	三、九九七

此の表に依ッて之を觀れば妓樓の數は別段の增減なきものにして、乃ち僅に十位に止まるものにして、十八年より二十一年までに十戶の增せしを見るのみ。(然れども決して減せしにはあらざるぞ) 而して娼妓の數は如何、年々百位の增殖に達し、十八年より二十一年までの四年間に、七百四十九人の增殖を見る。斯く年々增殖の傾向ありて減少の狀態なきは果して如何なる現象ぞや。更に一步を進めて國家經濟の點より之を論せんに、此の東京府下のみの娼妓四千七百四十六人の身体に關して、幾何の金員を消費するか。吾人は考ふ、娼妓なるものゝ身上には實に多額の金員を要するものなると、假りに一人一ヶ月の消費額を十圓づゝとすれば、實に四萬七千四百六十圓の大數に達するなり。遊冶郞をして此の四萬七千四百六十圓の金額と斯かる不德の事に費さゝらしめば、其の結果や大に見るべきものあるを知るなり。口にこそ四萬七千四百六十圓と一言にはいへ、此の金額は我が貧なる日本にては決して尠少なりといふ可からず、實に高等中學校の學生六千七百八十八人を養成するに足るなり。然れども素と是れ

表面上の觀察たるに過ぎず、娼妓の公許を廢したればとて斯かる譯には萬行き難けれども、幾分の差違は必らず生ずるある可きを知る。兎に角梅毒は恐る可きの病症たるに相違なけれど、彼の金額を以て之を購れざるを得ざるものとせば、吾人は隨分其の高價なるに驚かずんばあらざるなり。殊に梅毒果して公許有るが爲に防ぎ得可く、公許なきが爲に防ぎ得可からずとば、到底信じ難き說なるが如し。不德男子は皆娼妓の梅毒なきものと信じて――勿論公撿を受け豫防を爲しつゝあるものなれば、充分其の毒なきものと信じて、心配なく掛念なく、魔界に通ふものなり。然らば果して此の惡病に感染することなきかといふに、大に然らず。其の結果より推せば、或は公撿あるが爲めに不德男子安心し、其の安心よりして意外にも多分の病毒を受くる者あるに至るや未知る可からず。吾人は是れ等の事に就きても充分なる調査を遂げんと欲するなり、

存娼論の第三義に曰く、廢娼などゝは決して目的を遂す可からざるの空論たるに過ぎず。前にも論ずる如く表面に於いて之無きに至らしむるも、裏面に於いて之有るに至らば何ぞ之を廢娼といふを得ん。然り而して彼れを移して此れに置くのみならば別に敢て論ずるまでにもあらねども、其の兩者何か大害を爲すかといはゞ實に表面にあるものにあらずして、必らず裏面に在るものならざる可からず。要するに彼の廢

娼論なるものは、唯表面の躰裁上にのみ視線を注ぐものにして、深く實際上の利害を顧みざるものなり。

廢娼說の駁論に曰く、是れ尤も取るに足らざる妄論なり。而して第一義の議論を益々引き延ばしたるものに過ぎざれば、殊に反駁の勞を取るにも足らざるなれども、假りに一歩を讓りて、公許なければ密賣淫の起るものと爲し之を考究するも、尙此の論の成立たざるを見る。偖娼妓の公許破れて密賣淫起り、表面に之無きに至りて裏面に之有るに至りたりとし、而して先是のみにて判定を下さば、裏面汚れたるも表面奇麗なれば矢張廢したる方宜しきなり。更に進んで其の數に至り、表面の百人滅びて裏面に百十人起るとせば、それにては廢せざる方可なるが如し。然るに百人滅びて果して百十人の起るを確かむるを得可きか。吾人は決して其の然らざるを知るなり。兎に角其の增減は、預め知る可からざるものとし、一先雙方を調和して百人滅びて百人起るものとせん。然れども彼れは公許せられたるものなり、此れは密賣するものなり、彼れは公然と意張りて賣るものなり、此れは人目を恐れて密かに賣るものなり、彼れは何人に對しても臆する所なし、此れは巡査の目を避けつゝあるなり。故に彼れは思ふ存分に賣るを得るなり、此れは思ふ半分、若しくは三分の一、時に依りては全然賣り得ざることあるな

十一

り。而して之を買ふ者に於ても、彼れに在りては單に道德を破りて買ふに過ぎざるなり、此れに在りては道德と法律とを破りて買はざるを得ざるなり。一括して言へば、彼れに在りては唯道德を破りて賣り又買ふ、此れに在りては道德を破り、且細目を忍びて賣り又買ふ、兩者の及ぼす所の結果は果して如何。斯く兩者を對照するも公許の不可なるを知るに足る、密賣も勿論不可なるには相違なきも、公許に比すれば幾分か可なる所あるを知るに足る。而して是れ尙一歩を假して然るあるものなり。

存娼論の第四義に曰く、公許は探偵に便なり。

存娼論の第五義に曰く、一朝公許を廢せば糊口の道を失ふものあるを如何せん、乃ち其の現在の營業に依つて生活せしものは、何に依つて衣食するを得るか。

廢娼說の駁論に曰く、此の第四義第五義は特に論破するの必要なし。世には是れ等の妄說に對しても丁寧に辨解するの正義の士はあれども、吾人ハ之を臚列するを屑とせず。何となれば餘りに手ぬるしと感ずればなり、嬰兒の譫語にまで辨解するの要を見ざればなり。

偖存娼を主張する者は右の五義を以て金城鐵壁となし、此中に籠りつゝあるなり。然れども素と道理に合はざる妄論なれば、折角の金城鐵壁もまた右の如くに微塵に打

破せらるゝなり。嗚呼如何あリても娼妓は廢せざる可からず。而して吾人は未何人も言ひ至らざる一事と論じ、愈々廢娼の正理なるを確め、益々廢娼せざるべからざるを示し、以て本論を終らんとす。

魔界に出入する不德男子の分類を試みよ、是れ實に吾人が見遁す可からざる要點にはあらざる乎。若し是れ等の不德男子にして全然劣情を抑へ難きもの、乃ち如何ありても止むを得ざるより魔界に出入するものとせば、成程存娼論者のいふ如く密賣も起る可し、轉比例の比較にて起る可し。然るに若し又是れ等の不德男子にして、中には劣情を抑へ得るものあり乃ち止むを得るものありとせば如何。何人も其の密賣などの轉比例の比較を以て起らざるを知るを得ん。吾人熟々不德男子の總体を見るに、中には實に止み難きものゝみならず、止むを得て止まざるものあるを認むるなり。夫是れ等不德男子中には職人もあらん官吏もあらん(官吏も職人に相違なきも先世の通語に隨ふ)書生もあらん、商人もあらん、妻あるものもあらん、妻なきものもあらん、中には又惡人もあらん。然らば是れ等を分解すれば、職人、官吏、書生、商人等なる可し、再び他の方面より分解すれば、妻ある者と、妻なき者となるべし。先第一の分解に從て之を論せんに、官吏書生の如きものは、其の魔界に出入するの不德なる位は辨へ居る者と見做さゞる

可からず。而して一時の劣情を抑へ難きより出づるものと見做さゞる可からず。故に是れ等は所謂止むを得て止まざる者にして妓樓あるを以て往く者なり。若し之無ければ、道德上の罪人たるのみならず、法律上の罪人とまでなりても密賣を買はんとする者なかる可しと思考す。　他は職人と商人となるが、是れ等の中にも今日現在の有樣にては「あるからゆく」といふ者多きを見るなり。　次に第二の分解より之を論ずれば尙更に明白なり。　妻なき者の往くは兎に角、妻ある者の往くは、同じく止むを得て止まざりしものと謂はざる可からず。　乃ち假りに是れ等の不德男子を一萬人とし、實際其の中にて止むを得ざりしもの幾人ある、止むと得て止まざりしもの幾人ある、他の九千九百九十九人は盡く止むを得ざる者とし其の中の一人のみ止むを得て止まざりしとするも、吾人は言はんとす娼妓の公許を廢せば直ちに一人の利を見ると。　加之彼の不德男子中には全然其の劣情あらずして、他に誘はれて屠所の羊の如くに往くものあるにあらずや、娼妓を買はざれば朋友間に幅利かざるを患ひて往く者あるにあらずや、却て之を風流と心得て往く者あるにあらずや、小說の材料を得んとして往者あるに非ずや。妓樓なければ此くの如き輩は止む者也。

且又國家の體面なるものも甚大切なるものなり、之に就きて輕々くに看過する吾人未

だ其の可なるを見ざるなり。惟みるに我が邦に於いては他邦に對して誇示す可きものの甚だ多きなり、遙に劣るもののあるにもせよ。先第一に國體！爰に例し奉るは餘りに恐れ多けれども、

天照太神より綿々たる一系統を以て今日に及び奉れる

天皇陛下を戴くを得るとは、吾人如何なる語を以て萬邦に誇らんか。吾人は已に幸にも斯かる誇る可き事由を有す、之と竝びて又幾多の誇る可きものを有す。而るに道徳に關する事に至りては……嗚呼吾人また何事をか言はん。吾人は夙に倒に懸かる白扇とも見る富士の高根を望み、心神を快ふすると同時に、吉原洲崎等の筆にするも忌まはしき妓樓の街頭に聳立し、旭日に映じて燦々たるを見て、覺えず嘔吐を催するなり。

嗚呼我が日本人――大和民族たる者少しく此の點を考へ見ずして可らんや。我が日本國は實に他の萬邦と其の性質を異にするの國なるぞ、我が大和民族は實に他の萬邦の人民と其の位階を異にするの臣民なるぞ。此の日本國にして何魔界を存するは豈忌む可きの至りならずや、此の大和民族にして到底劣情の奴隷たるを免れざるを證する魔樓を殘し置くは、豈恥づ可きの至りならずや。

十五



○結婚の栞

奇玉散人

第四、學識藝能あるもの。

私は先學識から論じませう。凡ろ男にまれ女にまれ、學識の長けて居る程結構なことはありませぬ、夫故外の事情が同じなれば私は學識の長けて居る婦人を喜ぶに相違ない。が、世の中の事は盤になりませぬ。學識高い女子抔には壯健な人がありませぬ、又無い譯です、何故なれば學問抔を修むる女子は、身躰發達の盛りと云ふ時節に強く心力を勞らして、身體に廻はるべき養分を皆腦に奪ッて仕舞ます。もと養分にハ限りがあります、夫故一方に多く用うれば、一方に不足するのは當然です。偖身躰の既に弱い婦人、最早結婚の第一の目的に適ひませぬ。即ち壯健なる子を擧ぐる事が出來ません。さて人の妻として此の目的に適はぬもの程不都合な者はありませぬ。夫故今爰に全く無學文盲で、身躰の非常に壯健なる女子があります。又外に學識は高けれ共非常

に薄弱い婦人がある。偖此時に當ッて何れを妻として永く幸福が得られませう。私は斯様な時には、先甲の婦人を娶ることを躊躇せぬでありませう。成程女子にも學問は必要です。が、身體の弱いに代へても得たいと云ふ程の必要はありません。然し勿論女子にも一ト通りの學識は望しいものです。全るで無學文盲は甚だ以て迷惑です。先づ中等以下の商法家や農家にしても、手紙の往復帳簿のつけ方、又金錢の出納位は出來ないでは困ります。又中以上には別してさうです。殊に官員役員などの妻君となる婦人は、夫の知人や朋友に應接し得る位の見識がなければならぬ。客と夫の話を聞いても譯官の手を經ねば分らぬ樣でも耻辱です。が、斯様な者も隨分あります、私などゝも是は歷々の奥さんぞと思ふて、別に心せずして漢語抔を用ゐまするに、存外氣の毒をすることがあります。又母となッて後も其子に敎育を施す位な、學識がなければ困る。幼兒の間の敎育は主もに母の責任です。夫故母が賢ければ産まれた子も必ず賢い、古より今に至る英勇豪傑の跡を尋ねて見なば、多は賢い母の敎が其本となッて居ます。

私の考でハ通例の家に歸ぐ女子は、高等小學科を卒業した位の學識があれば澤山だと思ひます。斯許りの學識でも往くゆく我經驗と併せて用ひたらんには、大抵の間には合ます。が、此上に尙二三年も必要な學科を修めたならば、それでこそ充分です。然

し其二三年も非常に困難なる學科を修めて、身躰を損ふ程でありては却ていけませぬ、寧そせぬ方が增しでわります。されば其間に如何なる學科を修めませうか、是は一つの問題です。人の境界は樣々です、決して一概には申されませぬが、私の考では、先づ國語、漢文、地理、歷史、數學、生理、家事經濟位の學科で充分かと思ひます。此中で地理と歷史は知らで濟ませば濟まぬでもない、然し世の中の出來事は皆此二學科に關係して居ます、夫故此智識がなければ、生涯の間に非常に快樂の種を欠きます。人の此世を樂しと思ふハ、日々世の中に起ッて來る樣々なる事柄を見聞くことも一つの種です。次に數學、——是は一ト通りで澤山です、此例位迄心得て居れば充分です。開平、開立、級數、求積なんどいふものは殆んど用はありませぬ。次に生理學は甚だ必要です、食物の消化、空氣の呼吸、血液循環の道理なんど一ト通りは知らねばならぬ。自分に身體を持つて居ながら、何故自分は食物がなければ生活が出來ぬか、又食物ハ何處で消化して如何して、體質に代るものか、又人は何の爲めに常に空氣を呼吸するか、何故運動せねばならぬか、是等の道理を知らずして法外な事をすると、極めて危險い事か出來る。又誰が考でも分ります、自分で自分のする事を知らぬといふは、阿房の極點といふものです。偖又次には家事經濟です。是は言ふ迄もなければ省きます。

當節我日本國で高等敎育を授くる女學校でハ天文學、地質學、博物學、物理學、化學、幾何學、代數學、三角術或ひは哲學或ひは外國語などいふ學科を敎授いたしますが、此等の學科は婦人に取ッては殆んど無用なるのみならず、又何れも皆非常に困難な學科です。强壯なる男子ですら三四年も勉强しなば、靑い顏をするものが多い、去るを薄弱い婦人の身で、いかで此困難に當られませう？試みに御覽なさい、府下の高等なる女學校の生徒で、高級の位置に在るものに滿足な者は殆んどありませぬ。或は肺病或は胃病、偖は又心臟病など樣々の病氣あれど、子宮病などは別けて多い。されば結婚しても中々に子は得られませぬ、幸ひにして子を設けても決して壯健なる子は出來ない。夫のみならず母は常に病身です、從ッて天死する事が多い。斯樣な弊害がありますからして、先頃文部省では各府縣尋常師範學校の女子の修學年限を縮めて三年と致しました。是は誠に至當なる計らひです。然し其校の敎師が、若し文部省の意を酌まずして、年期の短い代りに、學科を忙しくしたならば、一向に甲斐がありません。が何れも皆敎育家の寄り合ひ、させる愚かな考はありますまい。

次に藝能に就きて陳べませう。凡そ人の妻たるものに最も必要なる藝能は裁縫でありませう。裁縫の出來ぬ妻はど不都合なものはありませぬ。衣服の調度は家事の

半ばを占むるものです、然るに是が出來ませねば、家事を取るの資格は已に二分の一を失ふたものです。

次にいけ花、茶の湯などは差したる功能はありませぬ。舞は運動には宜しけれ共、藝としては價はない。唯私の望ましいのは音樂です、是も是非にといふ程の必要もありませぬ。中以下の家では嫁さんに琴三味を掻き鳴らさせて、樂しむ譯にも行きませぬ。夫故折角稽古しても三三九度の盃が、琴や三味への離別の盃！して見ると音樂は勉強する程の張合がない、又實際知らねばとて、妻君の資格を失ふでもありませぬ。とはいへ音樂といふものは美術の中の女王です、其人心を感化する力は實に非常なものであります。そは先つ頃花の舍主人がいと詳しう述べられた樣ですから、私は省く事といたしました。さて此非常な感化力をもてる音樂を習ふた乙女と、習はなんだ乙女とを試みに較べて御覽なさい、必ず思ひ半ばに出る事があるに相違ない。

音樂の中でも猥褻な歌曲は避けたいものです、三味には兎角猥褻なものが多い。私の考では琴、鼓弓、月琴、琵琶、オルガン、ブァイオリン、ピアノ杯は宜しからうと思ひます。之も成るべく優美のものを撰びたい。

（未完）



○曉鶯　福羽美靜

きゝ馴れし、八聲のほかに、うぐひすも、あかつき告ぐる、春のこのごろ。

○春車　町原熈麿

咲きにほふ、はなにうかれて、小車の、めぐる日かげもしらぬれるかな。

○月前梅　仝

うめのはな、咲のさかりの、にはの面に、こぼれてにほふ、月のかげかな。

○籠阪懷古　畠山健

旅人の、たもとやいくよ、ぬらしけん、かごさかやまの、まつのしたつゆ。

○和氣淸麿　津々良一如

いかばかり、赤きこゝろに、てらしけん、宇佐のみやゐの、もち月のかげ。

往時頼山陽がはじめて佐藤一齋に遇ひし時、なんぞ近頃の傑作ともいふべき文章は見たまはぬか、と問ひけるに一齋、さなり近頃の名文と思ひて評し置きたる文章あり、といひつゝとり出だし示したり。山陽は、これ必ずむかしの韓退之蘇東坡などの文字と比ぶべき漢文ならん、と思ひ之を披きみたるに、豈圖らん馬喰龜次なるものが、馬代を催促せし假名がきの手簡なりき。其は甚名高きものにして、讀者諸子には夙に知り居らるゝことなるべけれど、今之に就きて佐藤一齋、那珂梧樓兩家の評を得たれば、玆に掲ぐることゝせり。

○馬喰を業とする龜某なる者人に與へて債を責むる書

一金三両馬代、（那珂梧樓曰單刀直入是提起法）みぎ、うまだい、（又曰重疊說下○自覺紛氣端然起疊說法）くすか、くさぬか、（又曰遣與不遣二項雙推是雙關法）こりやどうじや。（又曰使人先思其處置是曰問法以上爲起部）くすといふなら、それでよし、（又曰撤開得法文勢有頓挫是撤開法）くさぬにつけては、おれがゆく、（又曰漸々入去愈妙）ゆくにつけては、たゞおかかぬ。（又曰一句主意是通篇警束以上爲中股）かめがうでにははねがある。（又曰結尾何等勁拔是總收法以上爲結尾）

佐藤一齋曰、有抑揚、有頓挫、有波瀾、有起伏、文理井然。

那珂梧樓曰、看ヨ他ノ重疊說下シ來リ一緩句無キヲ、其間遣與不遣ノ二項ヲ將チテ雙關ト爲シ、乍チ遣ノ一項ヲ撤開シテ、重テ不遣ノ一項ニ歸シ末ニ骨アルノ一句ヲ

以テ他ヲ悚動シ來ル。其氣魄光燄、項羽ノ宋義ヲ責ムルノ語ト馳騁スルニ足ル。

○白猿物語

故　荷田在滿

百年ばかりのむかしなりけるとりや、相摸國に住みける人、にしの國にや事ありけん舟海路をとめつゝゆかんとて、ともなふ人みたりよたりもありけらし、あるみなとより舟出してけるに、いとあらましきあらし、また風いたくおちて、おもはぬかたにふねをやりぬるほどこそあれ、たゞ一時あまりがほどに、幾百里ともしら浪にゆられつゝとゆけば、いまやくつかへりて、千尋の底のもくづとやなりなん、といとゞこゝろはそくおぼゆるよ、ある島よふき出しぬ。猶はやちのふきやまねば、舟の中にはとゞまるべくもあらぬもの から、いかなるしまともしらねど、人々きそひあがりつるに、島のたゝさよこさいくばくしもあらねば、あなたのかぎりまで殘りなく見はらかすに、人てふものもなく、家てふものもみえず。木だちものふりてしげきに、浪かぜ枝をならすおと高く、草はらおひつゞきてふかきに、みつしはなぎさをひたすこと遠し。げにはからずもあやしき所に來にけるかな、とかなたこなた見わたすほどに、ましらどもあまたひきつれて出來ぬ。たけきゝざしのなきけものなれど、群りつればいたくおろろしきこゝちす。この時風

のちからいさゝかおとろへて、浪のたけもやゝひきくなりゆきぬれば、人々また舟にうちのりぬる中に、相撲なりける人は島のこのもかのも見つゝありきければ、一人のりおくれてけり。人々はましらのかしこさよ、しづこゝろなくこぎ出づると、その舟かへりよせぬ、とよばへど駒の耳ふく風にきゝなして、まかぢぬきおろし、はる〳〵とぎへだつ。いかようるはしかりしもわすれて、かくはすてつゝをゆく事、とうらむる聲も浪風のみさろひて、いまは誰が耳にか入りぬべき。斯くてありはつべきにもあらねば、もろこしの蘇武がいにしへ、わが國の俊寛がむかしのためしもあれば、いかにもしてうゑをまぬかれ、こゞえをしのぎ、てまたいたらん舟のたよりをこそたのまめ、とやう〳〵にかなしみをおさへ、しひて心をなぐさめゐつるを、ましらどもこととふことは能はねど、さしこえしていざなふかたありとしるし。いかならんもしらねど、さそふまゝ〳〵ゆきぬるにはがらかなる洞に入りぬ。洞のなかにひとつのしろき猿すめり、これなんましらの長なるとしられて、こゝらましらどもつきしたがひかしづくさまなり、やゝありてそのしろき猿、あまたの木の實をとり出してあたへつ。かのひとうゑざりければ、よろこびてとりはみぬ。斯くてよりしろきましら、かの人を洞の中にこめおきて、日ごとにつとめて出行きつゝ、くさ〴〵の木の實をとり來てあたへけり。このましら女の猿なりけれ

ばかの人と妹背のまじはりをなさん事を、ねもごろにこひけるに、あさましとおもふものから、いたくうとみなば、此後いかならむもはかりがたくて、心より外よむつまじくあひわたりければ、ましらはいやましよ心をつくし、こゝろざしをはこび、朝なけにあさりしてはごくみやしなひける。月日ふるうちに、ましらみこもりてけるが、つひに子猿をうみ出ぬ。かの人はましらにかしづかれて、木の實をはみゐければ、いたくもうゑやらず、洞にかくろひて露霜をさゝへぬれば、またこゞゆる事もなかりき。されど人ならぬものと住みわたりて、あさましきことかぎりなく、故鄕おとづれたえてゆかしき事やるかたなし。いかなる日のいかなる時か、この島により來る舟ありて、浪にうかびなば、再かへりうることもありなんものを、と朝に夕にくりかへし、心のいとのおもひをれど、きのふとあかしけふとくらして、島の松風ことばにひゞくこゑのみ、耳に滿ち胸をふたぎぬ。しかのみならず、ましらが片時もかたはらをはなれやらねば、あはれながらはたうなさく、木の實かりに出行くほどのひまにのみぞ、ひそかに濱邊ようち出つゝ、青海原を見わたせば、沖つ浪かげおそろしく、はま松風おとかまびすしく、日の出るかたを東とはさとれど、わが故鄕はいかでいづくのかたともわくべき。おもひめぐらせば、心ぼそさのみまさりて、とみかうみ見つゝ居るに、みつしほにかくれぬ沖の石ならで、舟にまがふべ

きかげだに見えず。 かくてやゝにくちはてぬべきとおもへば身にかこち世をうらみてもたれありて言の葉を聞きわかつべきものもなければかたらひて心をやるたつぎもあらず。 たゞ日ごとに濱邊にたゝずむをのみおのがあした暁のしわざとなしゐけるにこの島にいたりてよりすべて三年ばかりにもなりぬらむとおぼゆるころつとめてましらはつねのまゝにあさりに出かの人もきのふまでのごとく濱邊にたちぬるにいかなる國の舟にやありけんこれもわがごとく風をいたみ吹きはなたれしと見えて島の磯ぎはちかくこぎわたるあり。 見るに心もとびたちぬべく聲のかぎりをあげてよばふにこぎよせてければ身のあらましをかたりもあへずとく打のりてひたぶるにいそぎゆかんとこふるうちにかのましら子猿をゐて出できぬ。 こゝらの猿も皆したがひて來てかの人の舟にのれるを見てかへしよせねといへばえに唯さけびにさけぶ聲はまかせにたゞひて浪のうへはる〲耳をつらぬくばかりなれどなどかはこぎかへるべき。 かぢのまに〳〵やゝ遠ざかりゆけば白きましらなきてれふしおきてはさけびあかきかほばせいやてりそへて朝日にかゞやきて手をあげ足をつまだてゝくるしみまろびけるがいまはたよばずとやれもひけんをたけびしつゝたちわかりてかたはらなりける子さるをいだきて千ひろの底よ入りけるとなん。 これは我とも小泉何

がしが、いとけなかりしほどに、やそぢあまりのおきな、かの相撲なりし人とうるしかりしか、聞えつるよしかたりけるとぞ。 心なきけものながら、なれぬるわかれのかなしびにたへずして、身をつくしつる、いとせめてあはれなれば、たはふれよ白猿にかはりて、舟をしたうときのこゝろを、

こぎかへる舟ははるかのおきに出し、今朝のわかれと、しらざるぞうき、

中々にうきをましらの、ちぎりかな、みざるわはざる、むかしこひしも。

元文未のとしみなづき望の夜、たはふれにしるす。



束髪色風琴

漣山人

序

ある夜不思議の夢を見る。 十七八妙齢の美形、忽然として吾が枕邊に現はれ、「善

つて哉！善哉！郎君起きて頂戴な。！」寝耳再なれども頻伽の聲、なんでふ聞のがしになるべき。更紗の臥衫はねのけ、前かき合してかしこまれば。美形ォホヽと打ち笑み。「そんなに眞面目におなんなさると、申し悪いんですが、チト郎君にお頼みがあつて……」「ナニお頼み？數ならぬ吾等にお頼みとは、如何なる仔細か申し聞かされよ」「その仔細も申しますは、一體斯うでございます。世間よ小説家が澤山あつて、隨分妾共の事をお書きなさいますが、皆はんの皮相ばかり、眞の内幕を書いて下さる方がないので、皆さんも殘念がつて入らつしやるのョ。それで此間も扣え所で、皆さんと相談して、今度何方かにお願ひ申さうと云ふことよなりました。處で漣さんには去年の春娘作者を願つた御縁もあるから、矢張りあの方に願はうと、その爲妾が參つたのです。どうか聞いて下さいナ！」「ハヽ、何の事かと存せしに、それは近頃改つたお仰せ。元より吾等役目なれば、何とて否み申すべき」さりながら、只内幕とのみよてはわからず、そも御身は如何なる御方ぞ？」「聞いて下さいますか、嬉れしいこと。妾達は……コレ此なのョ」。くるりと體をひねれば、翠の黒髮左ねぢりに卷き。異香馥郁として、作り物とも覺えぬ薔薇の花、斜めにこれにさゝり。肩より脊にかけて、海老色のショール房々とさがれり。「漣さんわかつて？」「ハア」「そんあら頼むでよ」。云ふと等しく何

處ともなく風琴の音靜かに聞えて、件の美形は幻燈の如く消え失せぬ。逆總毛だつて嬉れしがり、隨喜の涎硯池にうけて、武佐墨すりながし。昔し其頎が顰をば、今樣に文字つて――束髪色風琴。――覺束なき調の程は、皆さん御免遊ばせ！。

其一　もめん綿

上　うぬぼれの鏡が浦

今の束髪に本間綿子と云ふがあつた、播州姫路の産で今年十八。父は大藏省の屬官を務め、明治六七年頃から、一心にかぢり着た電信の功驗があつて、今では驅出しの奏任官よりは、收納も餘計取れるから、隨つて暮しむきもまづ豊かだ。お綿はこれが一粒娘。蝶よ花よと育てられたもの丶、蝶――花、どうして比較にはならず。正直の處――頬の肉厚く、額傲慢にして鼻は謙遜に。口は尋常だが唇は薄い。でも色が白いので其の七難も隠れ、何處やら可愛らしく見へるから。一寸すれちがつた時などは、隨分振かへつても見たくなる。されば當人はいつかどの美人氣取り。衣裳の好み簪のかれこれ。度々母親は小言云ふが一トすねすねればその小言の腰も折れて、アイ〳〵ト遡らはぬも親の慈愛。その有り難い母の慈愛より、近所の書生に噂されるのを嬉しく思つて、毎朝學校へ行く前には、鏡に對するとや丶一時間。催促の二度も受けねば出行て

かず。その位故學校の成績はあんまりよい方ではなく、成績表にはいつも中程以下に名が見へて居た。

此年の九月、不圖した事から風邪を引いたが、風邪位で學校休むのは、毎日途中で逢ふ書生に對しても濟まぬ譯と、絹ハンケチ頸にまきながら、押して外出をしたのが障はつて、少しばかり熱が出て、胸がシク〳〵痛いとの御託宣に。母は心配して醫者をまねき、診察をしてもらふと、氣管支カタルで少し肋膜に異狀があるから、用心なされたがよろしいとのこと。それからはばつたり學校も休むで、隔日に醫者を見舞はせて居るうち、とう〳〵肺病の初期とまで出世した。そも肺病とは、四百四病の中でも隨分の難病。これに取りつかれたが因果、一生青い顔で送らねばならぬもの。だからそれと聞いた時の母の狼狽。引かへて娘の喜悦、喜悦？ハテ！その譯は當人にも分るまいが、兎に角肺病と腦病とは、病氣の中でも氣のきいたものゝ樣に、考られるとは……ても、さても。肺病ならば今の中に、養生して根を斷たねば。その養生にハ、まづ鎌倉か房州邊へ暫時轉地するが一番と、醫者には進められたものゝ。さて此の病人を―可愛い一人娘をどうして手離されやう。ト云ふて家は無人のことだから、附けてやるべき者もなし、ト、母親は當惑の額を痛めたが。今時の娘はさて強い者。

「それなら妾一人で參りますよ。

「馬鹿お云ひナ、お前一人で行かれるものですか。

「アラ、お母さんこそ馬鹿なことを。妾だつて、小供ぢやなし。一人で旅に出られないとがあるもんですか。學校の、ミス、マリーなんぞは、十六の年一人で亞米利加から入らしつたワ。だから日本の女は意氣地がないツて、笑はれるんです。――それに房州の北條なら、此春皆さんと行つたこともあるし、宿屋も懇意だから、一人だつて行かれますよ。

「さうかイ、そんなら、お出でだけれども……

ト女親は氣も弱く、いろ〳〵と案じたが。當人の云ふことなら確かだらう、一か撥か遣つて見ろト、冒險主義な良人の言葉に何うか斯うか勇氣も付き、心元ないながらも支度してやり。十月の廿幾日と云ふ、天氣のよい風の無い日、靈岸島から氣船にのせて、房州へむけて立たせてやつた。出立の當日なども、母は娘より先へ、起きて、何くれと世話をやき。靈岸島まで送つて來て、端舟へ乗り移つてまでも、――娘が極まり惡がつて、よい程に聞き流すのもかまはず、氣を付けてお出でよ、氣を付けておいでよ」とくり返し〳〵。間の拔けた滊笛川面に響かして、朝の七時過ぎに船は靈岸島を出た。乘合の人と云

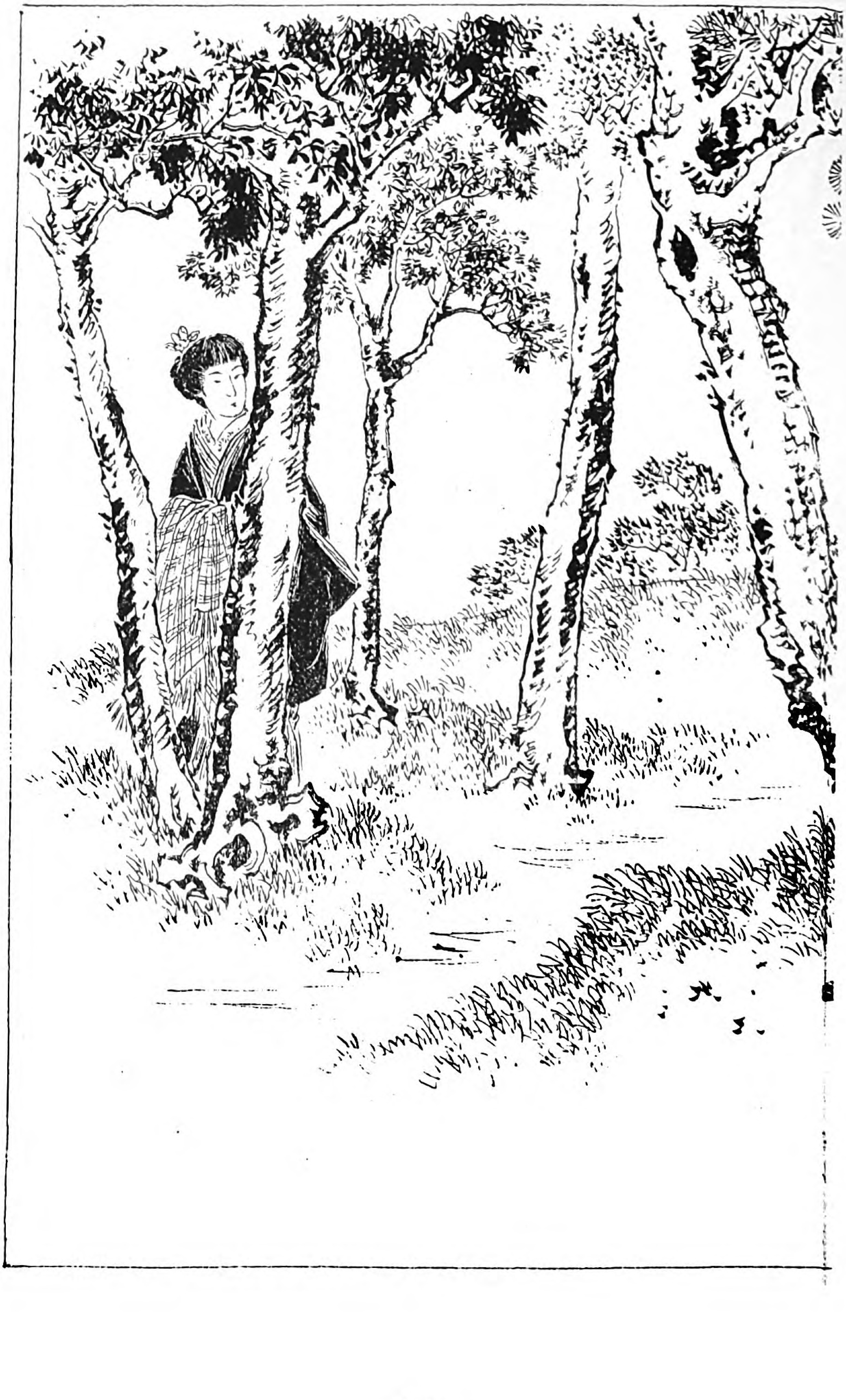
つては、日にやけ黒むだ漁師でなければ、頸筋ょ垢ためた田舍娘お綿でも此處におけば塵塚の鶴とも見へる。下の船室は醉い易いからと、お綿は最初から甲版に登つてあちこち歩行いて居たが。秋の朝風折々襟をかすめて、毛孔がよだつ樣なを、ショールちぎれるまでに纒ひつけて、チット我慢し。船首の蓙の上に坐はつて見たり、また機關の運轉をのぞいて見たり……。

其中に富津の砲臺幽かに見へて、羽田の森影を消せば、そろ〳〵波も高く成つて、胸が變になりだしたを、まぎらせる爲の霞か。雲か。口の中で唱ひながら、欄干に凭て恨めしげょ向ふを見れば、まだ鋸山の峰も目立たず。あの山の下をめぐつてからも、まだ七八里。此の春のと思ひ出づれば。又もむかつくのを唱歌で押えて、額を細い指で押して居た。

船にあるとやゝ半日あまり、漸く北條に着けば、まづ蘇生つた心地。本船から端舟へ乘り移る時、打つける潮水、新調の銘仙の裳を濡らしたが、これに氣を配る暇もあらず。靑ざめて頰と鬢の毛亂れさして、辛うじて濱邊へ上り。荷物と受取て車を雇ひ、一町ばかりの處走らせて林屋へついた。入らつしやいましト出迎ひに出た下女れ嚊さんまだ忘れもせず。

「オヤ、よく入らつしやいました、お一人でございますか。





「ハア。
「それはまァ　ようこそ。　お浪ャ奥の三番へお通し申しナ。
座敷へつれられてホッと意氣。　程なく茶盆を持て來たお浪。　これは此家の下婢で、廿三四の肉逞ましい大年増。
「本間さん、お船は如何でございました。
「そんなに搖れやしないけれども、妾は船が嫌いだもんだから……。
「左様でございますか、さう致しますとお支度はもう少々後に致しましやう。　此春は大勢樣でございましたが、今度はたつたお一人でございますか。
「少し養生に……。　あの時は賑かだつたチ、毎晩トランプや歌がるたで。
「ホ……　妾が始終墨をつけられまして……。
「今頃は淋しいやうだが、他にお客があるノ。
「ヘイアノ離座敷の方に書生さんがお一人居らつしやいますぎりで。
「書生さん……何處の。
「矢張り東京からお出での様でございます。
「さうかイ。

「貴孃お湯は、召しませんか。

「沸いてるなら這入りましやう、それから御膳にしておくれ。

「ヘイ、お湯に召しましたら、さつぱりなさりましやう。只今お浴衣を……。

湯に這入て氣もさつぱりとし、腹もこしらへてしまつたが。さしづめする事もないから暫時近邊を散歩してト、林屋を出て、男ならステッキと云ふ處、さうもならず。用意のショール小脇にして、濱邊の方へブラリ〳〵。濱邊へ出れば、此處には地引の網引くとて、男女うちまじり、譯もわからぬ冗談云ひ合て、怪しげな掛聲して、綱を引くありさま、都人には珍らしく面白さうに眺めて居れば、此の邊りに束髮姿、彼方にも珍らしく、始終お綿の方を眺め勝ちなる、そこにも永く居られず。

またブラ〳〵松原の中へ這入て行くと、枯れ黄ばんだ草の陰に、牛に踏み殘された野菊二三輪ちらほらしく。又は野生の南藤、青く茂つた松の梢から、赤くぶらさがつて居る烏瓜。――そゞろ詩人の眼を引いて居る。お綿は濱邊で拾つた貝殼を、掌の中でがら〳〵云はしながら林深く這入て行くと、――不思議！何處ともなく讀書の聲、しかも洋書を讀むやうな……。此の田舍にさりとは床しいとト、その聲を知る邊に段々近よつて行くと向ふの太い松の幹にもたれて、一人の男が、一冊の洋書を、さも面白さうに讀

むで居た見るよりお綿の心中ゑは、はや十分の小説氣。そろ〳〵傍へ近寄て行ても、彼方ハ熱心に讀で居て更に氣が付かぬ樣子。なほも足音を竊むで、其男の側正面ゑまはり、一本の松の小影からのぞいて見ると。お綿の心中ゑ横いたにたがハず。年頃廿一二の書生風。上から見下ろすやうに成て確とわからぬが艶々しい散髪少しちゞれて、格好よく波をうたせ。色ハ白く鼻筋は透つて、口元もまづ尋常。二子の綿入に秩父の羽織。靴穿いた足を一本投げ出し一本たてゝその膝頭に頬杖をつき、一心に洋書を讀で居る塩梅……。それゑ一人の佳人が——妾ゥ此方の松の影から、そつと覗いて居る處、此儘畵にして見たい、寫眞に探つて見たいト、お綿ハ餘念もなく見惚れて居たが。それを憎いと思つてか、自分の穿いて居た駒下駄が、松の根をふみはづして、一寸躓いた物音に、件の書生は初めて氣が付てフッと見上げた。不意うたれて此方は赤面、でも知らぬ人、でまかしの挨拶するともならず、極まり悪い思いをして、そこを通りすぎるのを、男も暫時見送つて居たが、三四間はなれた頃には、又讀書の聲が聞こえた——然し以前とハ低く。

お綿は心ならずも其處を去つて……、でも思切つては去られす、なほ十間ばかりの間の處を逍遙しながら、折々男の方に氣をつけて居ると、やがて男は讀書をやめ、本をふせて懷中に入れ。傍に置いた帽子を取つてかぶり、衣物の塵を拂らつて立上つた。——歸

るのか知ら？これを認めてお綿、わざと一端遠くはなれて、それから其男の歸るあとを、見へ隱れに付て行た。

ついて行くと、其男れ松原を通り拔け、細い畦路傳いに往還へ出て、それから北條の町の方へ。お綿も自分の宿へ歸る路だから、其のあとを徐かにつけて行くと、やがて二また路。右へ行けは林屋、左へ行けば北條の町。それを右へ取つて……、オヤと思ふ中に、その男は濟まして吾が宿――林屋の門を這入つた。サ、これを見屆けたお綿――そんなら矢張り。――はや胸はドキ〳〵。

二三分後れて自分も宿へ歸れば、やがて夕飯。これもすまして五六分たつと、亭主の信介か宿帳持つて、次の間から半身にぢり入り、

「ヘイ御退屈さまで。此度はようこそ……。ヘイ御面倒さまでございますが、一寸承はりまして。

宿帳？オヽよいもの！

「一寸貸して下さい、妾が書きましやう。

「左樣なら恐入りますが。

宿帳取りわげて繰つて見れば、自分より一人以前ゐ。

東京市芝區西久保巴町二番地　米田ヒサ方
無職　兵庫縣士族
日比元
廿一年十ヶ月



○文明之母新年附錄を讀みて　美濃笠松　撫箏女史

先日の諸新聞で、文明の母新年の切刊には現今文學大家數氏の小說を掲載するとの廣告と見ました。で、妾も賣捌所より一冊を購ひ、之を熟讀するの榮を得ました。流石は大家のお揃ひだけありて、再讀三讀、ます〳〵その妙味を感じ、遂に妾のまはらぬ筆を驅りて、記者さま御許まで御禮かた〴〵卑言を申上ぐることゝなりました。

1　內田遠湖さまの「雪中松柏愈靑々」

これハ獨乙文の譯著であるとのこと。が、妾は原書を存じませぬゆゑ、何とも申上

げられません。

2 漣山人さまの「かゝみ餅」

中々の好文字、二孃の心情精密に寫し得て妙。甚だすら〳〵と實情を書き出だされましたのは、實に感服の至りです。結末の『お孃樣お風邪をめしましたか』の一句は、最も力あるやうに覺えました。

3 蝸牛露伴さまの「妙七情」

作者お得意の文章――流暢の細君の諫言、滔々論じ來り說き去ッて讀者の息も續く間もありません。眞に（一瀉千里）の勢！　或讀者も讀み了り（あゝせつなかッた）と吐息きされました程。且主人の碁盤を惜む有樣、（アノ通りの碁盤欲しくて〳〵云々……あゝ欲い）までは誠に其の有樣を見るやうです。結末の（是れが鉈を振上げられし御手か）の一語を以て其の後を示されしなど、實に巧みではありませんか。

然しながらこの小說の如き事實は、實際有ることでせうか？　一字一句、論理整然たるお說ですが、斯くの如き事實、斯くの如き細君、實際あるでせうか？

4 柳浪子さまの「紫陽花」……上

形容詞の巧れ實に作者の專有です。女親子を寫されし段、眞に一幅の繪畫です。

が、美妙齋氏の言葉の如く《批難は敬服と共に加はります》で、強ひて非難――と云ふ程でもありませんが――申せば、おむらの母の言葉少し適當でないやうに思はれます。例を擧ぐれば娘の前で男の月旦――これは作者の御言葉――（あの人ゝ屹度れ前を何とか思ッてるよ、おれからよく家の前を通るもの》これが母がその娘に對しての言葉です。皆樣いかゞ思召す？

5 鐵筆將軍さまの「三十日の月」趣向は少し陳腐の樣です。が、流石は明治文壇の勇將軍、其の文章は頗る壯快の文字です。

あゝ妾ごときの賤の女が、かゝる大家の御作を彼是申上ぐるとは、誠にをこがましきわざと存じつれど、御高作を拜見せし去るしまでに、かく申上げしなれば、何とぞ不敬の罪おゆるしの程、謹んで希望いたします。

○都の花三十號附録

「むこえらび」の盲評

佐々木櫻雲

何がお目出度いのか、一月になると新聞を初として、月に百部足らずの怪い雜誌迄、附錄のヤレ何のと頗だ散財をして、讀者を引入れイ

ャ愛せらるゝ段、吾々看る者の喜び、など之に及かん。　扨都の花ハ、例年の通り「聟撰び」なる附錄小說、加之當世言文一致家の親玉さやら、世間でもて囃さる、嵯峨の舍先生の御著作、小生も難有拜見仕候。　拜見して餘りの有難さに何か御禮申さばやさ、色々考へしが、別段新規の趣向も無之、失禮ながら苦々しき盲評を奉るにぷん。

本編ハ三回ょ別ち、趣向ハ例の諷刺的より來りし聟撰び、否嫁撰びなり。　余本篇を評するに先ちて、一寸申し上ぐべき事あり、何ぞ哉？。　ろもく嵯峨の舍先生といッば、去歲都の花に「くされ玉子」の著ありしより、雷名愈々揚きて、大に諷刺的に妙あるの名上る。宜なる哉先生の著や、皆な諷刺的にして、「くされ玉子」を見又之を見れば、少しく前者ょ劣るの念あるも、諷刺に至てッてハ非常ょ激しく、浮氣の姬君、徃々自分勝手の觀定を妄信し、天保者流焉んぞ論するに足らんや。　さ、一寸見の外貌に戀慕して、生涯の誤謬を爲し、嫣然さしてほゝゑみし花も、雲掩ひ月翳ぶる夕、可惜落花さ散りて水深き川底の藻屑さぷり、大切な親御樣ょ思ひかけなき心配をかけ、又自分でも二さない生命を捨つるょ至る。　其のなげく可き浮華、此浮華てふ二字諷刺的ょ綴られし者さ見ゆ。　眞ょ他の小說を見るょ、斯かる姬君の觀定違ハずして、其の戀人終に名上り、が己識見を見せびらかすょ終る者比々皆之なり。　其が中ょ一派流を異にせられし先生の技量、感服々々。　浮氣の姬君一讀せば、煩惱の雲はれて眞如の月を現するさなるべし。　ア丶出かされたりく。

さ、馬鹿賞にほめ囃したもの丶、又考へて見ればいやモウ趣向にも似合はないた言葉つき、實に本編を見れば、跡野の言葉多くして、嘔吐を催さざるを得す、しかも堂々たる交際官試補の妹君にましまして。「……姊樣よく來ておくんなすッた」。又「……不可さ被仰のですの」などゝ。も少し書き樣は御座らぬ乎。　又「お有りですか。」等一寸せし事ょて大ょ紙面を毒する者あり。　アゝさうでなくッてよ。さ著者は仰ッしゃるか、又先生はうるさき程言葉を倒敘法にせられたり。　例は「大層よく片附て居るねに」「今日は。」「如何したの」「起へ。」「堪忍てお來れ、氣ょ障ッたら」の如し。　聞惡くしておさなしからす。　若夫是等を「今日ハ大層。」「兵は何如したの。」「氣ょ障ったら堪忍して。」させられしならハ、實ょ溫和にして、讀者一暫作者の大人風あるょ感服せんものを、惜々今日の小供作者ょ傚ひれし先生の御名案、聞たう御座る。

加之本編の文章。泛々猥褻ょ流れ、飛んでもない事云ひ出し、實ょ讀者をしてハッく思へしむる所あり。　冗長ょ亘るの恐れあるも先ッ一口申揩かん。　克己（かつみ）の妻別ち本編の主人公お条の姊の其の兄さ會話の所で、左か右かの一件、（餘り淫りがましければ本文ハ略す）讀者必す知らるゝ、なら

んが、又甚しからず哉。一陽來復、いくら正月がた目出たいにもせよ、餘り聞きぐるしきとならすや、亦た峰さ姉さの對話の所。十六七頃のお峯にしては……。又お峯が姉に向い、「何んだ、彼樣(あんな)弱むしやなんぞ私の數馬さんの方が。(一回四十四頁)之に次いて。「何時でも奇麗に周圍を掃除して、私が傍(そば)に坐ッて本を讀んで居るか、其でなければ編物して居るの、私が傍に居るのが一番氣が安くッて、何か出來るッて。」之れお峰の姉が、御亭主殿を楯にして己惚れし者なり。前者は已に戀人を亭主氣取りに私のと云へ、後者は御亭主を楯にして如此し。何如樣血統別けぬ姉妹(きやうだい)丈けに、己惚には各々長ぜしさ見ねたり。呵々。(たさへば浮氣娘の言葉にもせよ)又第三回に至り「眞實にまあ好のだ、どら一寸さして見やうや」さ。へ小供然さして聟撰でもしやうさ云ふお峰孃の言さも思はれない。傍腹痛し。又四回にて、藤田がお峰に鏝を挿さんさせし時。「是へ藤田の肥を「停」ッて落ちた涎」ア、余へ此に至ッて絕叫せり。絕叫せし儘筆を採りて盲評如件。

附言

本編は、趣向斬新にあらす、只誠刺的なり。而して本編の趣向へ、聟撰びに非ずして嫁入撰びなり。兎に角普通並々の著述物、偏に表紙の花やかなるに競く而已。願ふへお室先生よ、も少し神妙の筆をふるはせ給へ。



前々號(第十七號)の口繪に出だしたる伊賀の局妖怪と相見るの圖の解とし左の傳記を掲載すべき筈なりしが、都合に依りて本號まで延引せり。讀者宜し

く此を讀むの際彼を、參看すべし。

○伊賀の局

關根正直

伊賀の局は、新田左中將義貞朝臣の侍士に、篠塚伊賀守といへるが女にて、はやくより新待賢門院の御方に宮仕へしてありけり。女院の御所は、皇居の西にて、山につゞける所なりしが、正平二年の春の頃とか、妖怪出づとて人々騒ぎ恐れ合ひけるに、誰ありてしかと形を見定めたる者もなく、たま〳〵行き合ひたる者は、心地くらく成るとぞ申しける。さるは内裏より御宿直の兵者あまた參らせて、蟇目鳴弦など行はせければ、やがて靜まりにけり。其の年六月十日あまりの程に、いと暑き頃なれば、此の局庭に立出でんとて、しばし簀子の端に立給へるに、月の光り隈なくさし出でければ、

すゞしさを、松ふく風に、わすられて、袂にやどす、夜半の月かげ、

とひとりごちて、誰きく人もあらじと思ひたまへるに、松の梢の上より、からびたる聲して、唯よく心靜なれば、則ち身も涼し」と古き詩の句を打誦するに、怪しうて見上げたまへば、繪にかける鬼の頭にて、翅の生ひ出たるが、眼は月よりも光りわたるに、猛き武士の心も消え失せつべきを、さもあらばあれと打笑ひて、いかなる人にか有るらん。怪しく覺ゆるにこそ。名のりしたまへと問はれて、我は藤原の基遠にてこそ候へ。女院の御爲め

に命を奉り候ひしに、せめては亡き跡をとはせたまはれん事もこそと、頼みまゐらせしを其れさへなくて候へば、いと罪深く、かゝる形に成りて、苦しき事の彌增れば、恨み奉らんと思ひて、此の春の頃より、うしろの山に候へども、御前には、恐れて得參らぬにこそ候へ。あはれ、此の由啓したまひてんやと答へ申しければ、實にさは聞及びたりき。さばれ恨み奉るべき事かは、世の亂れに思ひ過ごしたまへるぞかし。されど今のことわりならば、啓して弔らひてん。さるにても御經には、いかなる事かよかるべき。心に任せはべらんと云へば、御弔らひには法華經にしく者候はじ。さらば歸りなんといふに、歸らん所は何處にかと問へば、露と消へにし野の原にこそ、亡魂は浮れ候へとて、怪しき光りは北をさしてぞ消えにける。局は見おくりて後、女院の御前にまゐりて、此の由を啓しければ、誠に思ひ忘れてこそ過ぐしつれと、てあけの日、吉水法印に命旨下りて、御堂にて三七日法華經を供養したまひけるに、其の後あへて異なるわざもなかりけり。

此のつぼね、一とせ武藏守師直の皇居を襲ひ奉りし時、禦ぐべき便りなかりければ、人〴〵猶山深く入らせたまひけるに、女院の御供に、はか〴〵しき侍士も附添ひ奉らで、女房ばかりなりけり。吉野川の橋、一間がほどふみ落して有りければ、詮方なくて、皆あきれて立たせたまへるに、此の局、其はとりの松櫻の、大きやかなる枝どもを引き折り〳〵

四十四

打わたして、女院を負ひ奉りて、人々をも渡しはてたまひけり。後に、其の時の大いさなる枝を、園部の六郎といふ兵者に折らせて、御覧ありけれども、かなはで止みにけり。いといかめしき事にてぞありし。其の後このつぼねは、楠左馬頭正儀の妻になんなりけるとや。

○最中の最なるもの

鐵筆將軍

合衆國

世界中最大の砲臺　合衆國モンローの砲臺へ、世界中最大の砲壘にして、米國政府も今日までに三百萬弗を費したるが、海防砲臺中無比なる精巧のものなり。

世界中最大の橋　ニューヨークとブルツクリンとの間に架せる鐵橋にして、其の全長五千九百八十九尺なり。

世界中最長の鐵道　線路の全長十五萬七百十マイル（千八百八十八年の調査に係る）よして、世界中最も長きなり。尤も一處の線路にあらず、國中のものを合算したるものなり。

世界中最長の電線　線路の全長十七萬千三百七十五マイル（千八百八十八年の調査に係る）にして、世界中最長のものなり。尤も是れも一處のものにあらず國中のものを合したるものなり。

世界中最大の湖水　長四百マイル、最大幅百六十マイルのシユー、ペリヤ湖なり。其最深の處にて、二百尺、最深の所に至つては九百尋に逹す。而して其水面は海面より高き六百三十尺餘なり。

世界中最廣の洞窟　合衆國ケンタツキー州、エドモンソン郡のエドモンス洞なり。

世界中最大の樹木　カリホルニアの大樹を以て最とす、チユーレーア郡の森林にハ高さ二百七十六尺、元の廻り一百五尺、地上十二尺の處よて廻り七十六尺なるものあり。乃ち其の樹影は二千二百尺以上の處を掩ふとあるへし。

英吉利

世界中最大の邦國　英吉利は其の本國にては我日本よりも小なれとも、其の領地をも合算すれば、實に世界中最大の邦國なり。乃ち八百五十五萬七千六百五十八方マイル——地球の陸地六分ノ一以上を含めり、人口も亦世界人口の殆と六分ノ一を有するなり。

世界中最大の大學　二十大學と五大學院より成立つ處のオクスホルド大學なり。

佛蘭西（フランス）

世界中最多の軍艦　佛國ハ實に世界中尚多の軍艦を有するの國なり、乃ち艦數二百五十六艘にして、英國の二百四十七艘に對し、九艘の超過なり。（共に千八百八十九年の調査に係る）

世界最大の圖書館　ルイ十四世の創立に係るパリーのビブリオテクヱ、ナショナル館にして、書籍百四十万卷、冊子三十万部、寫本十七萬五千冊、地圖海圖とも三十萬枚、貨幣勲賞共十五萬個を藏す。

魯西亞（ロシヤ）

世界中最多の陸軍　其の平時の陸軍八十萬九千九百七十三人なり。（千八百八十八年の調査に係る）

世界中最大の大鐘　モスコー府の大鐘は、高さ二十一尺、底の周り六十八尺、重量四十四萬三千七百七十二封度あり、世界最大のものなり。

丁抹（デンマルク）　世界中最大の公園　コッペンヘーゲンの鹿園ハ、世界最廣の公園なり、小河を以て園中を區劃し、坪數五百十一萬五千六百坪を有す。

支那（チャイナ）　世界中最大の堡壁　世界第一の大壁は、矢張萬里の長城なり、其の長さ一千二百五十マイルよして、五尺の堡を合すれば、壁の全高二十尺、下層の厚さ廿五尺、上層の厚さ十五尺なり。

墨斯哥（メキシコ）　世界中最高の火山　メキシコ國ピユエブロー府の南西三十五マイルの位置にあるポポカテペチ山は、世界第一の活火山なり。海面を拔くこと一萬七千七百八十四尺よして、其の噴火口は周回三マイル深さ一千尺あり。

埃及（エジプト）　世界中最高の塔　埃及カーナックの三角塔ほど高きものなし、乃ち塔の全長一百二十二尺にして、其重量は四百噸なり。

伊太利（イタリー）　世界中最大の隧道　はミランとルーセルンとの鐵道線路に當る、セントゴザードの隧道なり、乃ち其の頂上ハセーントゴザート峰のオーデルマットより低きこと九百九十尺あり。

斯く世界中最の字の附くものを算し來らば實に數限りもなきことなり。然れども我日本に於いて其の中に仲間入りを許さるゝものあるなし。とは讀者諸子の思惟せらるゝ所なるべけれども、請ふ慨嘆するを止めよ、我日本國には實に其の最中の又最なるものあるなり。世界萬國の羨視して措かざるものあるなり、神と謂はんか聖と謂はんか偉と謂はんか大と謂はんか、殆んど形容に苦しむほどのものあるなり。何ぞや。之

を見るも見ゑず、之を聞くも聞ゑず、小ならしむれば掌上に戴するを得べく、大ならしむれば宇宙に磅礴すべし。諸子は吾人と與に幸にも斯かるものを有す、其の形なく影なく、シカモ廣大にして形容に苦しむ程の不可思議物を有す。斯く謂へば諸子は既に了解せられしならん。了解せられしならば其の有難きを感じ、其の自らの幸福なるを識り、益々之をして廣大ならしむるを勉めざるべからず。

〇餘興

〇考物

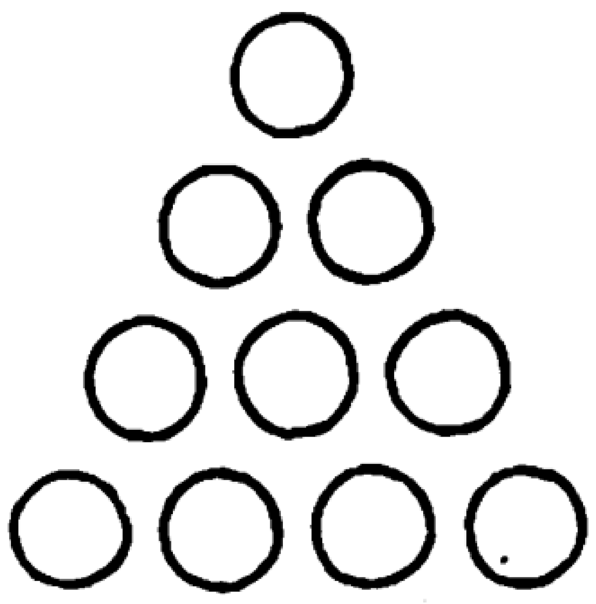
1 東京の人は一を聞きて十を、知り田舎の人は八百を見て一を知る。何故?

右　四谷　酔世道人　出題

2 人あり非常に酔ふて友人を訪問せり、然るに其の友人は至ッて酒嫌ひなり、話しするも厭やと思ひけん、早速三疋の魚の名ある紙を出だしたりしが、酔人は笑つて去れり。三疋の魚何なりや。

右　東京　橋本久想生　出題

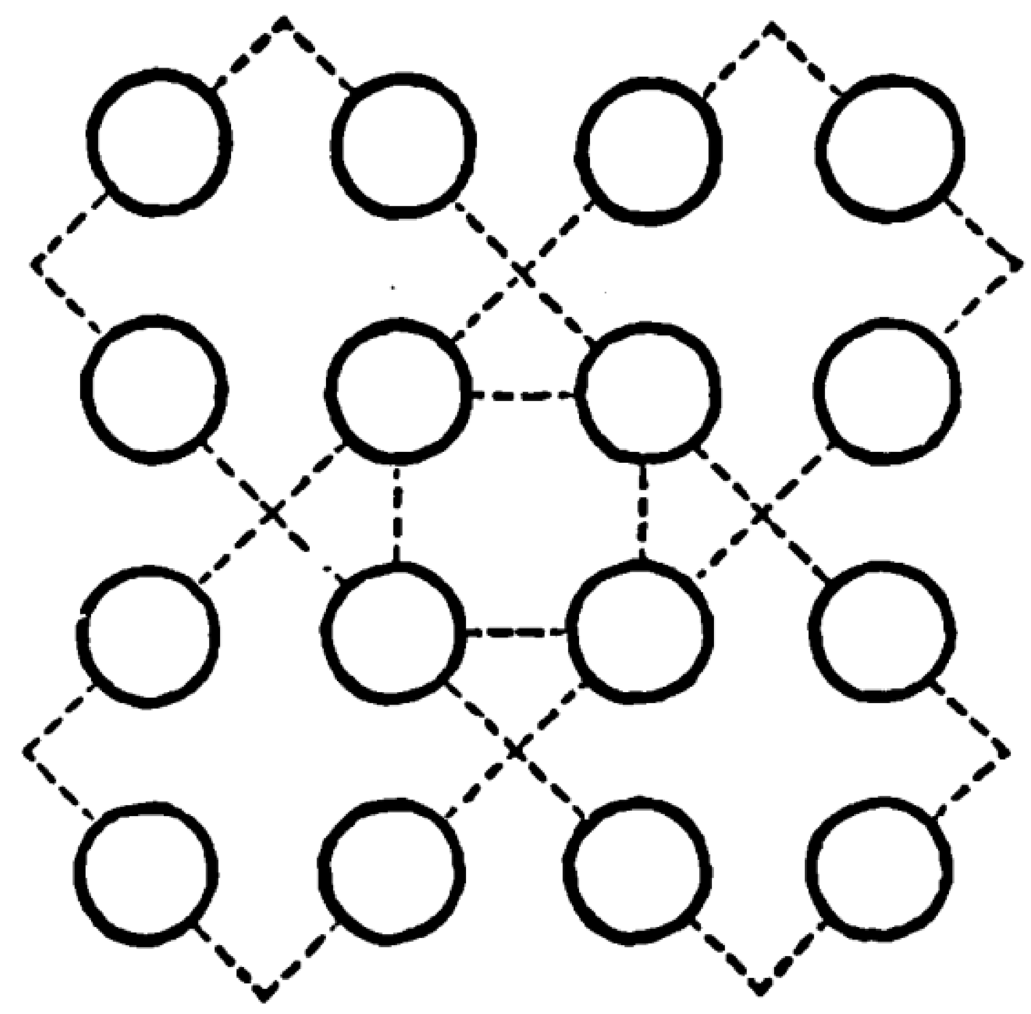
3



此の十個の正圓中三個を取り、他の周邊へならべ、元との等邊三角となすには如何せば可なるや。

右　志摩　中川徳松氏　出題

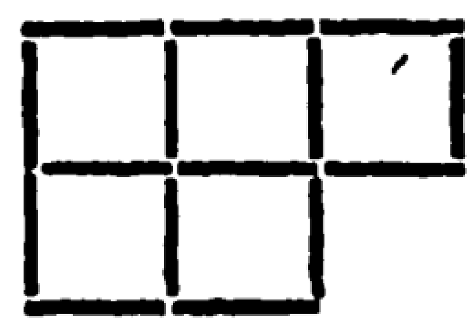
4



圖の如く十六個の正圓の中に、一より十六までの數字を置き、其の四角に係る數字四個、各々三十四づゝとするには如何せば宜しき?

右　大坂　琴水女史　出題

5



圖の如く十五の線を以て、五個の四角を作り、內どれでも三本の線を取り去りて、三個の四角と爲すよい?

右　芝　小林よし子　出題

6　成る鳥の名を二つ合せて讀めば、獸一匹の名となりまそ。これは何獸?

右　盤城　澤田庫之助氏出題

7　There are twelve boys and twelve apples. Each took one. How many remains ?

右　東京　礫川狂夫　出題

右七題の考物悉く御當てになつた御方には、南翠外史の傑作唐松操一冊を差上げます。但し三月五日閉函と御心得下されたし。

○前々號の考物解答、解答者百十一人、悉くお當てになつた御方九十二人ありました。

1 無三四、遠江、豊臣。

2 ゐたち、ゐたちばな。

3 梟。

○正誤　前號へ出したる第四の考物は、前々號に已に出したものですから取消しと致します。



○御命名式

本月三日宮中に於いて、去月廿八日に御誕生遊ばされし皇女の御命名式を行はれしが、其の次第を承るに、當日午前九時德大寺侍從長は、元田宮中顧問官の撰定に係る御親筆の御命名を携帶し奉り、青山御産所へ參向せられ、有栖川宮を始め、皇族及び在京の各大臣、樞密院正副議長、親任官、勅任官、麝香間祗侯等は午前十時より參賀の上、賢所參拜を仰せ付けられ、次で御祝酒を賜はりたりと申す。因に曰く、皇女は房子と御命名ありしやに承る。

○二位の局

從二位中山慶子の方には、不日從一位に進ませらるゝやに聞き及ぶ。

○教育勳章

或は小學教員の胸に、燦爛たる勳章の輝くあらんとす、吾人は大に之を賛成するなり。今更いふまでにもあらねども、學校は國家の本元なり、其の本元を訓導するは教育家に在り、故に教員にして熱心之に從事すると否とは、國家に大影響を及ぼすものなれば、教育行政協議會の設置ある上は、右協議會に於いて教育家の勤惰を調査し、勳章を與ふるの制を設けんとて、既に調査に着手し、右の雛形まで定めて、教育博物館中に備へある程に至りしが、偶々異議を唱ふる者あり、曰く、勳章の貴重なる所以は、其の種類の少きと、其の容易に授與せざるとにあり、然るに今教育勳章の制を設けなば、自然勳章の價値を減ずるの恐れなしとせず、故に別に教育勳章を作らず、瑞寶

勳章を與ふべしと。兎に角瑞寶にても、敎育にても、吾人は其の勳章の種類は論せざるなり、唯一日も早く功勞ある敎育家の胸に、燦爛たるものあるを見んと欲するなり。山の隈、水の涯、何の樂みもなく、隨つて茫然自失するが如き敎育家を奬勵し、活潑々地、熱心に其の業を勉めしむるには無上の好方便なる可し。

○結婚媒妁統計表

結婚の形勢も米價の高低と相伴ふ由なるが、吾人は左の統計を見て成程と感じたり。日本橋區檜物町渡邊媒妁所は、設立以來既に十年の星霜を經、近年は益々盛大に趣き、一ヶ年殆んど千餘の依頼あるに聞及びしが、殊に昨廿二年の如きは、米價の高貴なるに因し、嫁聟小兒の呉れ方、甚だ多かりしと云ふ。

呉方總計六百十名内

嫁　三百八十名

聟　百八十名

小兒　五十名

右總人員の内　華族七名　士族三百十名　平民二百九十三名

貰方總計四百七十名内

嫁　三百六十名

聟　八十名

小兒　三十名

右總人員の内　華族三名　士族二百名　平民二百七十名

○小楠公の神靈

本誌にも度々記載したる、河内國讃良郡四條畷神社へ、近日其の筋より神靈を送附せらる可しとの事にて、其は京都府廳へ到着すべきに就き、其の際廳員一統府廳の表門前に奉迎する筈なり。又此の度天皇陛下より同神社へ御寄附あらせらるべき、長守の御劒一口も、同時に送致ある可しと云ふ。

○實の一つだになきぞ悲しき

江戸開市三百年祭、既に吾人の餘りに賛成しがたき事なりしに、此の度或有志の諸氏は、此の茫々たる武藏野をして、今日の繁榮なる東京たらしめしの始祖は、太田道灌なれば、其の爲め石碑にても建てんと協議あるやに聞く。嗚呼德川家康は江戸に居せしが爲めと云はゞ、豊臣秀吉は江戸を家康に指示したるものなり、或る石工は江戸の爲めに石を礎りたり、或る土方は江戸の爲に土を運びたり、共に祭らざる可からず、共に碑建てざる可からず、

○歌人長谷川翁逝く

有名なる歌人長谷川壽山翁逝く。翁は周防岩國の藩士にして、通稱理平、一に保樹と稱し、又櫻戸主人と號そ。去年十二月より病に伏せられしが、本年一月九日遂に簀を易へられぬ、行年八十二歲。今翁の遺吟なりといふ二三を得たれば次に、

梅早

みかりする、鳥立のはらに、咲く梅は、
　思ひもかけぬ、えものなりけり。

袈裟御前
池水の、友衆の床の、かたらひも、
　今は悲しき、鴛鴦のつなぎ羽。
辭世
樂しさは、さこそと思へ、後の世も、
　花ともみぢの、山陰にして。

○琉球に言の葉の花咲く

常にても綠萋々たる琉球の天地には、此の度また言の葉の花咲き初めたるか如し。聞く所に依れば同知事丸岡莞爾氏の赴任以來、官民共に歌に熱心なりと。本年中の兼題は、

一月　觀兵式　二月　酒　三月　寄花戀
四月　源爲朝　五月　碁　六月　寄郭公戀
七月　新聞紙　八月　茶　九月　寄月戀
十月　陶淵明　十一月　競馬　十二月　寄雪戀

○國民新聞と江湖新聞

三宅雄二郎氏主事の江湖新聞、德富猪一郎氏主筆の國民新聞はいよ〳〵共に出でたり。國民新聞は櫻の如く、江湖新聞は梅の如く、國民新聞は孔雀の如く、江湖新聞は鶴の如く、國民新聞は猿の如く、江湖新聞は犬の如く、國民新聞は蚇蠖虫(しやくとりむし)の如く、江湖新聞は甲蟲(さいかち)の如く、國民新聞は桑實(そめ)の如く、江湖新聞は澁柿の如く、國民新聞は笑ふが如く、歌ふが如く、くすぐるが如く、江湖新聞は怒るが如く、怒鳴るが如く、なぐるが如く、國民新聞は洒々、江湖新聞は兀々なりと、或る人は評せしが當るや否や。若し當るとせバ、讀者諸子は二者何れを取らんとする乎。

○他の各新聞

善く云へば同業者、惡く云へば商買仇(かたき)なる江湖、國民兩新聞を始めとし、他の新聞もボツ〳〵新らしく出かけんとするを以て、是までの各新聞も睡ッては居られじと、頻りに勉强する樣子なり。而して火焰を吐き始めて、焰魔王の唐辛甞めたるが如きものあり、頻りにお化粧を凝らしてお多福の欠伸(あくび)したるが如きものあり。或は餘りに騷ぎ立ッて、豆藏の言ひまちがひしたるが如きものあり、或は一寸塗抹して夜鷹の顏自瞞しつゝあるが如きものあり。中には鼠の空巣の如くなりたる者あり、掃溜(はきだめ)の如くなりたる者ありと、又或る惡口先生は言ひき。

○國文國史講習所

此の度元田直、松野勇雄、丸山淑人、佐藤定介、黑田太久馬諸氏の發起に係る、飯田町五丁目の同講習所は、文學士其の他專門の學者數氏の贊成輔翼と得て、愈々二月十五日に開校せり。吾人は夙に其の確固なる成立なるを信ず、故に其の益々盛大ならんことを望むや切なり。

（二月十三日脫稿）

寄書

○祝新年　　　　美濃　撫箏女史

もゝちとせ、御代にくもりは、あら玉の、
光くはゝる、けふののどけさ。

○雪中梅花

ゆきつみて、それとわかねど、鶯の、
鳴く音かほれれば、花咲きぬけむ。

○文明のはゝを讀みて　　　　信濃　河村自牧

ともじに、文のはやしに、わけ入りて、
たどるしるべの、文はこの文。

ひらけゆく、御代の姿の、あらはれて、
讀むもたのしき、文はこの文。

○文明の母を讀みて　　　　埼玉　夜鏡庵梅者

粧はぬ、色香はゆかし、まつのはな。
末かたき、操のふしや、かざりたけ。
日に月よ、あらはす梅の、かほり哉。

○孝婦波都傳　　　　安房　雲陽樵童

波都安房國朝夷郡江見村農喜兵衛女也。年二十嫁和田村農良輔、良輔遊蕩多在外、不治產業、波都善事舅姑、毫無嫉怨之色。舅病風疾、起居飲食、必待人、波都日夜就養、待湯藥滌汚穢、三年未嘗懈怠。既而舅歿、夫亦尋死、波都有三子、而寡居、一貧如洗、未幾姑老喪明、於是愈益自奮、百方營生、夜爲人傭縫、僅得無逋租矣。夏就凉扇枕、冬脫衣溫席、時々自負至俗室、每屬必沂枝按摩、候其熟睡而後止、其抱保携持之深切、一如慈母遇嬰兒也。安政元年甲寅正月、姑老死、波都哀慟過人、鄰伍爭趨救哀、會送者莫不有淚焉。事聞縣令召賜白金三枚、以表孝貞。波都今猶生存　實七十二歲。

日本文學第十八目次

●日本文學●大寶令の法理（文學士有賀長雄）○龍馭托千相門（文科大學教授內藤耻叟）○國語の變遷（文學士高津鍬三郎）○車輿の制度承前（關根正直）●雜報○御講書始○歌御會始○皇典講究所講演發會及山田伯演說の大意○國文國史講習所○諸初の古典○日本戰史の材料●寄書○史筆は人の癖處、缺行及瑣事を書して其人の精神却て見はる文學博士（重野安繹）小說の深意（ぶが、みさ）○國語國文の敎授法を論す（安美齊主人）●雜錄○大臣論（久米幹文）○日本刀並に其飾裝品（小石伊勢治）○小田清雄見聞隨記●附錄○一喪一盛（落合直文）

一部定價金七錢○十部前金六十錢○廿部前金壹圓拾錢
○全國無遞送料○郵便切手代用ハ五厘切手に一割增
○爲替は東京牛込郵便支局宛振込の事

發行所 東京麴町區飯田町五丁目八番地 日本文學發行所

大賣捌所 東京神田區表神保町一番地 敬業社

傳道會雜誌第貳十號

明治二十三年一月二十一日發行

目次

○宗祖大師忌辰（歌）今小路澤悟　原口針水　齋藤聞精
今小路覺尊　岩橋興隆
雜詠（詩）赤松連城　梁瀨我聞　松島善譲
澁部寶麿　戸田定諦

○會説 大法主殿下の御直諭を拜聽し奉る
現今の僧侶を以て將來の佛敎を維持するに足る可き耶　同盟會員　講部智麿

○論説 學問の目的　同盟會員　梅原融九
大ひに女子敎育を振起すへし　正會員　加藤俊治

○說話 眞宗の化儀　故勸學　鬼水沃洲
三業相應　贊成會員　赤松連城

○雜錄 ●已丑除夕偶感 正會員小泉春樹－●氷－同盟會員眞能義淵）●自適（正會員松山成章）●病中作（贊成會員石田道人）●讀高山彥九郎傳●（正會員白笑山人）●迎年迎祉（正會員日種宗賢●夢（藤井いわ尾）

○雜報 攝津兵庫●何の兆候か●京都諸大寺の風向●人生識字憂患始●血を以て血を洗ふ●歐人佛學●大洲婦人慈善會●英國貴族社會の醜ぶん●越前大野婦人會●世中さまく●市川團十郎●敎育●醫藥の神●流說眞なるか●同志社の德義●家督相續●寄書批評－護法濟衆編－獅子吼－文明之法－爲德會雜誌－法の栞－眞理

○本會報告　○廣告

發行所 京都市東中筋花屋町下ル第十九番戸 眞宗青年傳道會

南翠外史著

再版

小說 唐松操（からまつみさを） 全

總ロクース 金字入最上美本 賣價廿八錢 遞送稅四錢

苟くも目に小說を見るものは我が文壇の老將に須藤南翠其人あるを記せざるはあらざるべし南翠先生の文章は流麗婉曲よして讀む者倦むを覺えず南翠先生の想像は富贍强大にして千百翻くるを知らず其の婉麗なる筆を以て其の豐贍なる奇想を描きたるものは我が「唐松操」とす此書唐松操なる一浪士が妖怪を退治て大いに英名を京攝の間に轟かし進んで天下の大法官となり大義高潔の名を得るに終ると雖も其間幾多の轗軻不遇を寫して剩さず理想と見れば理想、歷史と見れば歷史、寓意と見れば寓意、其の結構したる所の境遇れ讀者の境遇に依つて如何にとも觀察を下さるべし是れ「唐松操」が出色の妙地なりと爲す論より證據先づ一本を購ふて繙き給はゝ書肆の多辨を俟たずして快と呼び奇と叫び妙と稱へらるゝと疑ひなし

東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地

發行所 文昌堂 長島恭三郎

投書規則

本社に於いては今般投書規則なるものを設け、汎く投書を望む左の條々御一覽の上、筆硯に從事せらるゝ諸子は御投書あれ。

一、必ず學術の範圍を超ゆべからず。政事に亘るものは止むを得ず沒書とす、文藝、雜錄、批評、など最もよろし。

一、必ず亂書すべからず。如何に面白きものにても、亂書讀みがたきものは沒書とす。（半紙ならば一枚十行美濃紙ならば十三行位に認むべし）

一、是迄往々寄送し來れるものにして郵便先拂、若しくは不足等あり爾後斯くの如きは返戾すべし。

一、雜誌に掲載したるものには其の價値に從ひ相當の報酬をなすべし。

一、單に原稿のみを寄送せらるゝものは、郵筒に「生文社編輯係御中」と認むべし。

一、原稿取捨は編輯係に一任すべし、決して其の返戾を申込むべからず。

一、掲載の遲速も編輯の都合に依れば、決して催促すべからず。

明治二十三年二月

東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地

生文社

（遞信省認可）

明治廿三年二月十八日印刷出版

（東京々橋區弓町耕文社印行）